

オ、モ、テ、ナ、シ Omotenashi
オ、キ、グ、ス、リ Okigusuri
「置き薬」のこころを世界へ、そして日本では

発行：日本置き薬協会 事務局

以下は、「薬日新聞令和2年9月7日号」掲載記事の抜粋である。

「伝統の『置き薬』のこころを世界へ」と題した講演会とパネルディスカッションが8月27日、富山県民会館で行われた。アフリカのタンザニアの農村で置き薬システムの普及に努めている認定NPO法人アフリメディコ代表理事町井恵理氏が講演。パネルディスカッションでは置き薬システムを生んだ理念や配置販売業の現状や今後について意見が交わされた。

町井氏はなぜタンザニアの農村で「置き薬」の普及を思いついたか、に始まり、日本発祥の置き薬システムの「アフリカ版」「現代版」を目指して、モバイルマネーを活用した代金回収、アフリカと日本を繋ぐ懸場帳アプリの開発を行っているとした他、2030年までにタンザニア10万世帯で置き薬システムによって薬アクセスを改善し、さらにセルフメディケーション啓発を促進したい、と述べた。

パネルディスカッションで町井氏は、置き薬BOXを当初は「メディスンBOX」といったネーミングにしようとしたものの、あえて「置き薬」の言葉そのままに「OKIGUSURI」とし、アフリカ現地では「おきぐすり」で通じることなどを紹介。

パネラーの真生会富山病院真鍋恭弘院長は「OKIGUSURI」が世界の共通語となり、「OKIGUSURI イコール富山県」、「OKIGUSURI イコール利他の精神」、「OKIGUSURI イコール他者の幸せを願うところ」となって、置き薬の心が全世界に広められていけば素晴らしいと思う、などと語った。

また富山県立中央病院内科部長松田耕一医師からは、日本とアフリカの医薬品事情の違いや欧米製薬会社の理念などが話され、配置薬業界パネラーとして明生薬品工業(株)豊田博保社長、富山県医薬品配置協議会中谷一博顧問からは、日本における配置薬業の現状や課題などが述べられた。

町井氏は、富山売薬、大和売薬などの日本発祥の置き薬システムをアフリカで、世界に通用するOKIGUSURIにバージョンアップさせ、また日本に逆輸入出来たら嬉しく思う、と夢を語った。

置き薬・配置薬システムは、医療環境が未熟かつ小売り網が未発達で家族構成が大家族の社会構造、小売網が発展段階で大家族的な気質が残る社会構造に適合する販売形態である、と捉えている。発展途上国のいくつかでは、OKIGUSURIは浸透して行くだろう。

日本の社会構造がそうでない今、置き薬、配置薬業各社は下記のような提案で取り組んでいる。

- 先用後利の理念を踏襲する「置き菓子」と同様な利便性
- 置き薬ならではの独自の製品を訪問対面による直接の情報提供での顧客満足
- 付加価値の高いレトルト食品や缶詰などの食品の配置方式での商材拡大
- ウォーターサーバーなど別分野の進出

本件に関するお問合せ先 **日本置き薬協会 事務局**

〒332-0034 埼玉県川口市並木2-30-6 内外救急薬品内
Tel 080-5514-7511 (有馬) fax 048-251-9657

日 置 協